

河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅷ
野作遺跡

1992年3月

河内長野市教育委員会

序 文

豊かな文化財と自然環境に恵まれた河内長野市は、他の大阪周辺都市と同様に、住宅都市に変ぼうしており、そのため宅地開発、道路整備など都市基盤整備のための開発が進められています。

このような中で、先人が長い歳月にわたって残してくれた文化遺産を保護・保存し、後世に伝えてゆくことは、現代に生きる私達の責務であります。本市においては、開発に先立ち、埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書に発掘調査の成果を収録いたしました。皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存、研究の一助として活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに本書作成にあたり、ご理解とご協力いただいた関係各位に心から感謝の意を表します。

河内長野市教育委員会
教育長 中尾謙二

例　　言

1. 本報告は河内長野市教育委員会がトヨタカローラ南海株式会社から調査の依頼を受けて実施した野作遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、本市教育委員会社会教育課文化係尾谷雅彦・鳥羽正剛を担当者として、平成3年7月30日から着手し平成3年8月29日をもって終了した。
3. 本書の執筆は鳥羽正剛が行なった。
4. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の協力を得た。 (敬称略)
明地奈緒美・中村清美・中野雅美
5. 調査の実施に関しては下記の方々の協力を得た。 (敬称略)
トヨタカローラ南海株式会社、東洋設計株式会社
浦野巖・今西(杉山)和良・中西和子・久保八重子・村上貴美・喜多順子・
阿部園子

目 次

序文

例言

1. 位置と環境	3
2. 調査に至る経過	3
3. 調査の結果	3
4.まとめ	9

挿図目次

第1図 河内長野市遺跡分布図	1
第2図 野作遺跡調査地位置図	3
第3図 遺構配置図	4
第4図 西壁上層断面実測図	5
第5図 北壁土層断面実測図	6
第6図 石組遺構実測図	7
第7図 溝状遺構集石部分実測図	7
第8図 柵列遺構実測図	7
第9図 石組遺構・土坑1・P2・P3・鉄釘出土地点出土遺物実測図	8
第10図 包含層出土遺物実測図	9

表 目 次

第1表 河内長野市遺跡地名表	2
----------------------	---

図版目次

図版1 遺構 調査区全景(南西から)、柵列・溝状遺構全景(南西から)	
図版2 遺構 溝状遺構(東から)、溝状遺構集石部分(南西から)	
図版3 遺構 石組遺構(南西から)、鉄釘出土地点	
図版4 遺物 石組遺構・土坑1・P2・P3・鉄釘出土地点(1~5)、包含層(6~22)	



第1図 河内長野市遺跡分布図

第1表 〈河内長野市遺跡地名表〉

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	鳴尾遺跡	弥生時代・中世	46	加梅遺跡	古墳時代後期
2	塙谷遺跡	弥生時代～中世	47	尾崎北遺跡	古墳時代後期
3	小山田1号古墓	奈良時代	48	尾崎遺跡	古墳時代～中世
4	小山田2号古墓	奈良時代	49	加賀田神社遺跡	中世
5	菱子尻遺跡	繩文時代～中世	50	ジョウノマエ遺跡	中世
6	千代田神社遺跡	中世	51	庚申堂	中世
7	市町東遺跡	弥生時代・中世	52	栗山遺跡	中世
8	寺ヶ池遺跡	旧石器時代～縄文時代	53	寺元遺跡	奈良時代～平安時代
9	住吉元宮遺跡	中世	54	觀心寺	平安時代～
10	西之山町遺跡	中世	55	延命寺	
11	野作遺跡	中世	56	川上神社遺跡	
12	西代神社遺跡	中世	57	金剛寺	中世
	本多蘿蔭原跡	飛鳥・藤原時代・近世	58	日の谷城跡	平安時代～
13	古野町遺跡	中世	59	汐の山城跡	中世
14	鷺所蘿蔭原跡	近世	60	峰山城跡	中世
15	向野遺跡	繩文時代～中世	61	日野綾音寺遺跡	
16	双子塚古墳伝承地	古墳時代	62	仁王山城	中世
17	五の木古墳跡	古墳時代後期	63	岩立城	中世
18	法師塚古墳伝承地	古墳時代	64	タコラ城	中世
19	長野神社遺跡	中世	65	国見城跡	中世
20	育ヶ原神社遺跡	中世	66	福荷山城跡	中世
21	長池窓跡群	平安時代～近世	67	旗藏城跡	中世
22	伝「仲哀廟」		68	大江家	中世
23	上原近世瓦窯	江戸時代	69	石伝城跡	中世
24	上原北遺跡		70	左近城跡	中世
25	上原中遺跡	古墳時代・中世	71	清水遺跡	中世
26	第六古墳・上原遺跡	古墳時代後期～中世	72	秦海寺	中世
27	大日寺遺跡	中世	73	千里口駅南遺跡	中世
28	河合寺城跡	中世	74	地藏寺	近世
29	末広窓跡	中世	75	旗尾城跡	世
30	河合寺	中世～	76	葛城第18莊塚	世
31	福田家	近世	77	人見駅北方遺跡	世
32	烏帽子形古墳	古墳時代後期	78	葛城第17莊塚	近世
	烏帽子形城跡	中世～近世	79	栗浦堂跡	中世
	烏帽子形八幡宮	中世	80	流谷八幡神社遺跡	世
33	喜多町遺跡	繩文時代～近世	81	小野塚	世
34	上田町窓跡	古墳時代	82	蟹井灘北遺跡	世
35	上田町窓跡	近世	83	蟹井灘南遺跡	世
36	大領山遺跡	弥生時代後期～	84	清水阿弥陀堂跡	世
	大領山古墳	古墳時代後期	85	施現城跡	世
37	高向遺跡・高向南遺跡	繩文時代～中世	86	淹燈哩墓	世
38	高向神社遺跡	中世	88	堂村地獄堂跡	世
39	懸持寺跡	中世	89	天神社遺跡	世
40	剪門里遺跡	奈良時代～平安時代	90	中村阿弥陀堂跡	中世
41	宮山遺跡	繩文時代～平安時代	91	西の村阿弥陀堂跡	世
42	宮山古墳	古墳時代後期	92	東の村觀音堂跡	世
43	高木遺跡	繩文時代	93	光德寺	中世～
44	三日市遺跡	旧石器時代～近世	94	葛城第15経冢	近世
45	小塙遺跡	繩文時代～奈良時代	95	岩湧寺	中世～

1. 位置と環境

当遺跡は、河内長野市野作町733番地1他に所在する遺跡である。遺跡は、石川の左岸に広がる中位段丘上に位置し、標高131mを測る。遺跡の半径10km以内の主な遺跡には、旧石器時代から縄文時代にかけての寺ヶ池遺跡が北方にあり、古墳時代には南西に塚穴古墳、南東には烏帽子形古墳があり、中世には南東に烏帽子形八幡宮・長野神社遺跡、東北には古野町遺跡があり、近世は本多藩陣屋跡・膳所藩陣屋跡などがある。



第2図 野作遺跡調査地位置図(1/5000)

2. 調査に至る経過

当遺跡は、当該地に開発の計画があり、原因者の届出により平成3年7月9日に試掘調査を実施した結果、新規に発見されたものである。遺跡名は、地名にもとづいて野作遺跡とした。遺跡発見後、原因者との協議の結果、平成3年7月29日に覚書を締結し、発掘調査を300m²について同年7月30日から同年8月29日まで実施した。

3. 調査の結果

遺構面は、現地表から、擾乱土の表土(層厚20cm)、耕土(同5cm)、床土(同5cm)、ついで灰白色粘土(同5cm)、褐色粘土(同5cm)の順に除去すると検出された。

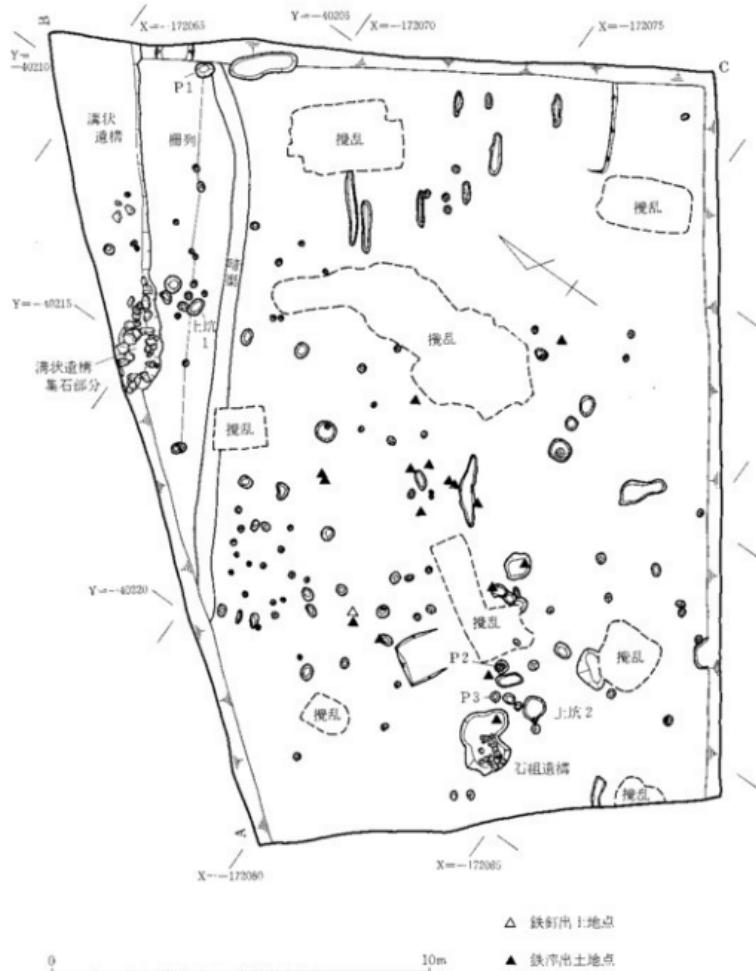
遺構

検出された遺構は、石組遺構1、溝状遺構1、柵列遺構1、土坑数基、ピッ

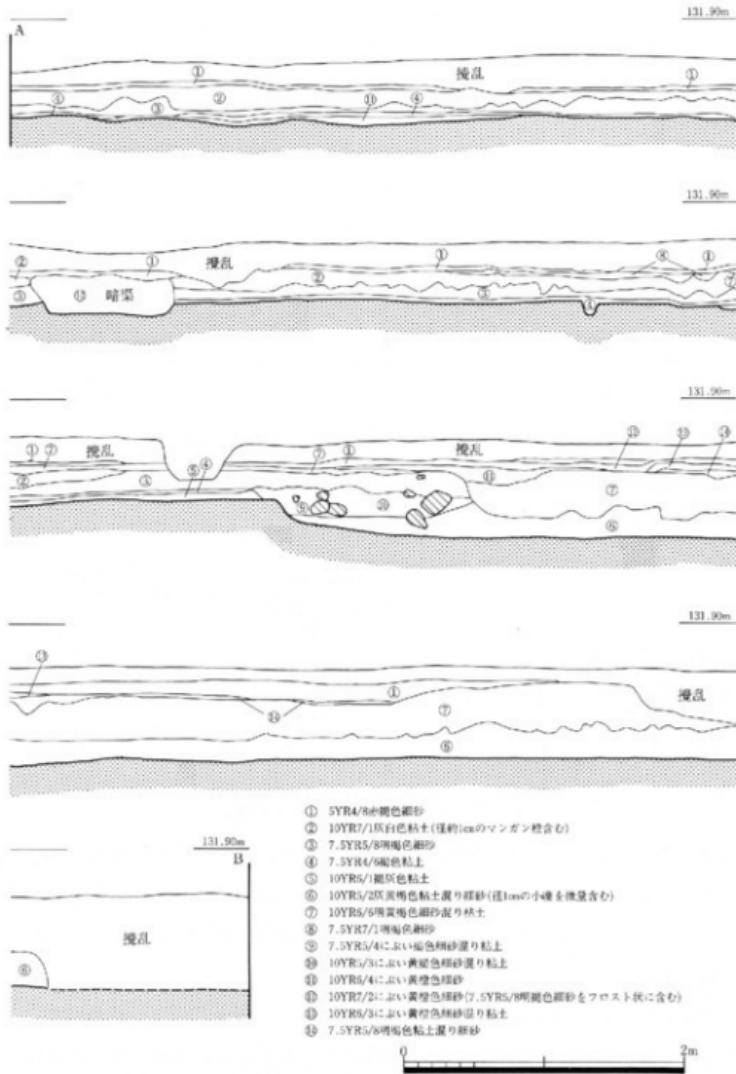
トが多数であった。

〈石組遺構〉

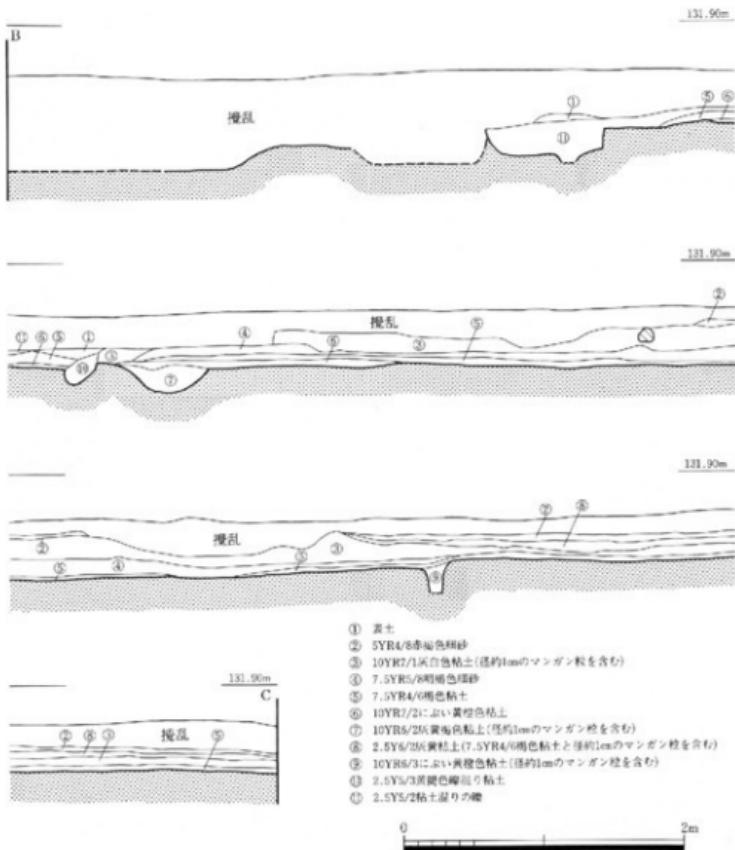
調査区の南端に位置し、規模は長軸1.5m、短軸1.4mで、内部に長軸0.9m、短軸0.5mの環状の石列を配する。石の径は0.1~0.2mである。深さは、石列



第3図 遺構配置図 (1/150)



第4図 西壁土層断面実測図 (1/40)

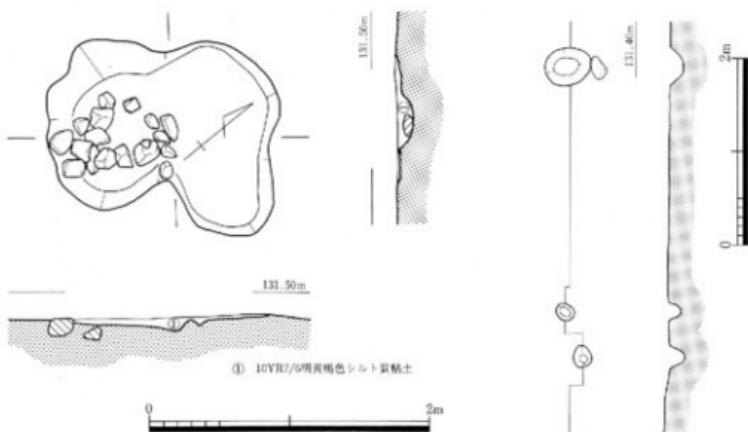


第5図 北壁土層断面実測図 (1/40)

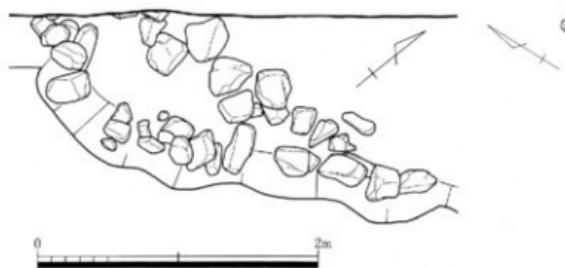
の最深部で0.14m、石列の周囲最深部で0.07mを計る。埋土は、多量の鉄分を含むため明黄褐色を呈していた。遺構内の石列や埋土には火を受けた痕跡が検出されないので、炉の可能性は低い。遺物は、鉄釘（3）と鉄滓が出土した。

〈溝状遺構〉

溝としての対になる肩部を調査区内では確認できないが、その規模と形状から溝の可能性が高い。位置的には、調査区の北隅を走る。検出された長さは、10.1mで、同じく検出された幅は、2.4mである。深さは、北端で0.1m、南端



第6図 石組遺構実測図(1/40)



第7図 溝状遺構集石部分実測図(1/40)

で0.18mを測る。遺構の南端には径10~30cm程度の石が集中していた。これは、元来護岸のための石が溝の内側に半ば落ちたものや完全に落ち込んだものと考えられる。遺物は、サヌカイト、土師質小皿、瓦器塊、瓦質甕、瓦質羽釜、伊万里焼碗、平瓦、鉄滓が出土した。

〈柵列遺構〉

柵列遺構は、溝状遺構の南に位置し、N-58°-Eに走り、検出された長さは10mを測る。構成するピットの規模は、P 1が長軸0.5m、短軸0.4m、深さ

第8図 柵列遺構実測図(1/60)

0.15mと、平面上南西に連続するピットと規模を隔する。連続するピットはほぼ円形を呈し、規模は、径0.12~0.25m、深さが0.05~0.18mを測る。中間の距離は0.2~2.3mを測る。上述の溝状遺構に沿うプランをもつが、土層観察から同時期の遺構ではなく、先行するものと判明した。遺物は、出土しなかった。

〈土坑1〉

□列遺構の列上に位置するが、土層観察から構成に属さないと考えられる。規模は、長軸0.5m、短軸0.32m、深さ0.04mを測る。遺物は、土師器、瓦器塊、鉄製小刀（4）が出土した。

〈土坑2〉

P 2 の南0.6mに位置する。平面形は、不整形な円形を呈し、径0.6m、深さ0.04mを測る。遺物は、陶磁器が出土した。

〈P 2〉

調査区の中央部より南に位置し、規模は、長軸0.34m、短軸0.24m、深さ0.3mを測る。遺物は、瓦器小皿（1）、鉄滓が出土した。

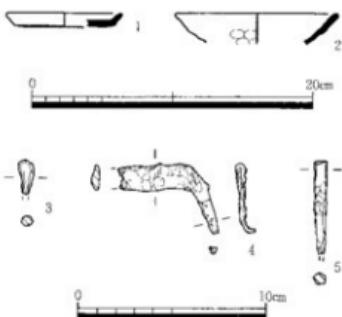
〈P 3〉

P 2 の南西に位置する。平面形は、不整形な円形を呈し、規模は、径0.26m、深さ0.27mを測る。遺物は、土師器、瓦器塊（2）、鉄滓が出土した。

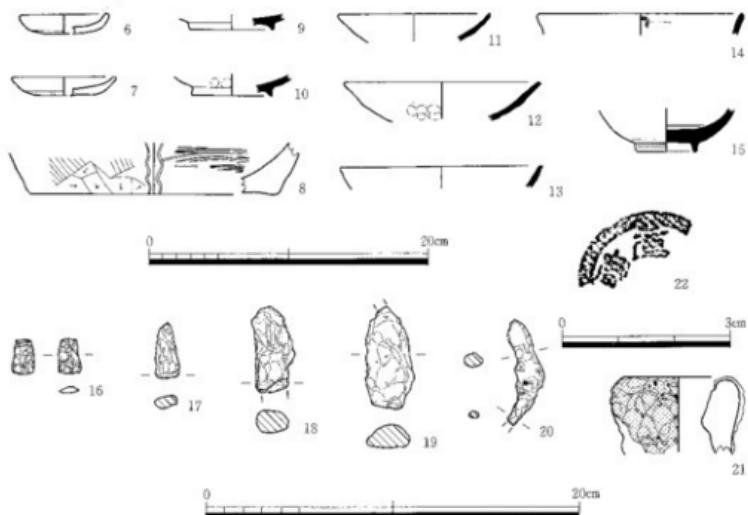
遺物

遺物は、サヌカイト、石鐵、瓦器小皿、瓦器塊、土師質小皿、土師質甕、青磁碗、伊万里焼碗、平瓦、蘭羽口、鉄滓、鉄釘、鉄製小刀の他、不明鉄製品が出土したが、包含層からのものが大半を占め、土器については、実測に耐えるものが僅少であった。遺物と上層から、溝状遺構と土坑2が近世の遺構であるのを除き、それ以外は中世の遺構であることが確認できた。

遺構に伴う遺物の量は、少なく、殆どが細片であったため、実測できたものは、



第9図 石組遺構・土坑1・P 2・P 3・
鉄釘出土地点出土遺物実測図



第10図 包含層出土遺物実測図

僅かであった。遺構からは（1～5）が出土し、包含層からは（6～21）が出土した。（1）はP2から出土した瓦器小皿。（2）はP3から出土した。（3・5）は鉄釘で、（3）は石組遺構から、（5）は第3図上△地点から出土した。（4）は先端を欠くが小刀と考えられる。包含層からの出土遺物は、（6・7）が土師質小皿、（8）が土師質甕底部、（9・10）は瓦器塊高台で、（11・12・13）は瓦器塊である。（14）は青磁碗口縁部で、（15）は伊万里焼碗高台である。いずれも細片であるため、法量や調整が明らかでない。（17～20）は不明鉄製品で、（21）は鐵滓出土地点直上から出土した轆羽口である。先端から外表面にかけては、鉄滓が付着しており、断面中芯部は黒変している。（22）は元豐通寶（鋳造年代15世紀以後）で、（16）はサヌカイト製石鎚である。

4.まとめ

調査の結果、遺構の時期は、主に中世のもので構成されることが判明した。中世には調査地が、轆羽口や鐵滓の出土により、金属工業に関わる作業場であ

ることが判明した。しかし、作業に従事していたであろう大鍛冶師、小鍛冶師、
鑄物師などの職人と精鍊、鍛練、鑄鉄などの作業内容は、いずれも特定できない。
またいずれの作業場にしても鐵に関わることから、温度、湿度、銷などの
諸問題を配慮したことが予想され、露天においての作業場は考え難い。しかし、
調査区内のピットから建物は、検出されなかった。出土遺物に数点の鐵製品が
みられたが、調査地における生産物であるかは不明である。

図 版



調査区全景（南西から）



柵列・溝状造構全景（南西から）



溝状遺構全景（東から）



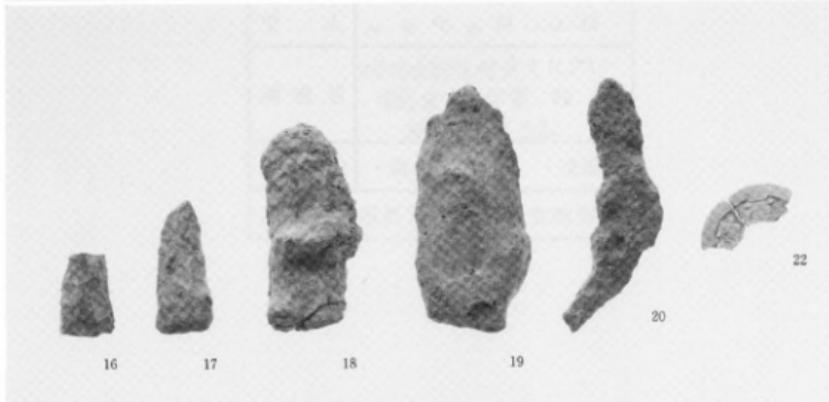
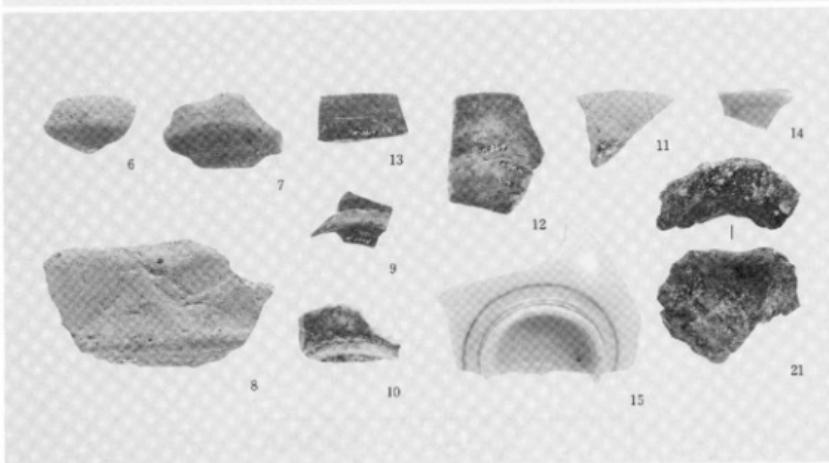
溝状遺構集石部分（南西から）



石組遺構（南西から）



鉄津出土地点



石組造構・土坑1・P2・P3・鉄釘出土地点（1～5）、包含層（6～22）

登録番号	738
受入	H. 4年 4月 24日
図書名	河内長野市埋蔵文化財 調査報告書 VII 野作遺跡
入手方法	・購入 <input checked="" type="checkbox"/> • 交換
河内長野市教育委員会社会教育課	

